

取材先、それぞれのその後

さて、こうした活動に具体的に関わっていく前の準備段階のステップとして、それぞれの団体と関係を継続することが一番重要なことであり、相互に補完できる協力の場を見出していくことが関係継続につながるであろう。例えば里美の月例会には時々社員の誰かが参加する。牛窓では放棄家屋の借り上げを積極的に支援する。甘楽ではフィールドワーカー養成講座に参加してみる。浜松では人材育成プログラムへの貢献を模索する。こうした関係を推進する中から次の展開となり得る活動分野を開拓していくことになるだろう。そのように考えると、取りあえずは4団体を集めた情報交換会の実施をアレンジすることが国際耕種にとってもそれぞれの団体にとっても意味があるかも知れない。本シリーズで取材した各地との交流状況や現地での最近の動きについて簡単に追記する。

里美（茨城）

- ・ 里美グループに対し、JICA 筑波野菜栽培技術コースの研修員受入れを要請し、有機農業を通じた栽培技術の実際を体験する研修プログラムを実施した。具体的には、参加研修員に対して身の回りの有用資材活用について里美のケースを紹介してもらった。
- ・ また国際耕種では、宅配有機野菜を里美から定期的に購入している。

牛窓（岡山）

- ・ 2008年11月に、「本気で農業を語るシンポジウム」及び「地産地消フォーラム」が牛窓グループや岡山大学などが主催となって開催され、国際耕種からも参加した。
- ・ 昨年度実施した新規就農支援プロジェクトや農業体験を通して4人が新規就農することになった。4人も瀬戸内農業経営者クラブに入る予定と聞く。

甘楽（群馬）

- ・ 今年もJOCV 技術補完研修受入れを行い、野菜隊員及び村落開発隊員候補生の受入れを行っている。
- ・ 筑波での研修事業への共同実施を検討した。残念ながら今回は実施出来なかったが、今後の協力関係の可能性を探ることになり得た。

浜松（静岡）

- ・ 企業的農業経営を担う人材を育成するための「静岡農業ビジネス企業人育成講座」が、静岡大学や県産業界との産学協同によって2009年4月から開始された。浜松のSさんやKさんもメンバーとして参加している。



本気で農業を語るシンポジウム



産地直送大市(ワッカファーム)



地産地消フォーラム

ところで、「鉄腕ダッシュ村」というテレビ番組がある。TOKIOのメンバーが自分たちの村を作ろうというプロジェクトで、古い民家を修復し、田畑を整備して耕し、自分たちで野菜を作り、米作りに汗を流し、秋には収穫を喜ぶ。しかし、このような農業や田舎暮らしにあこがれながら、なかなか実行できないのが現実である。一方、半農半漁ならぬ「半農半X」（「X」にはさまざまな職業、活動が入る）という生き方がある。農業にできる範囲で関わりながら、自らのミッションも遂行するという生き方は、農業をなりわいとしている専業農家からみれば「片手間」の「遊び」に見えるかもしれないが、このように多様な形で農に関わるしくみを作ることによって「農の底辺」を広げる努力も必要かもしれない。